

# お寺の社会性

— 生奥坊主のつぶやき —



竹中尚文

## はじめに

前回は葬儀屋さんの藤原さんの話を書いた。今回は葬式坊主の思いを書きたい。

### 1. 先日のお葬式

坊さん仲間から、ゴールデンウィーク明けに震災ボランティアに行かないか？と誘われた。私は寺を空ける時間がなかった。家内に3日程、寺を空けることは出来ないかと尋ねたら、無理だと言う返事だった。自分でも無理だろうと思って尋ねたのだが。東北の方の困難を垣間見て、何かをしたいと思っていた。日頃、社会の中に生きる坊さんを標榜しておきながら、何もしていないのは忸怩たる思いである。ボランティアに行った坊さん達から報告メールが入るのに動けない自分がもどかしい。

ウチの寺には坊さんが、私一人しかいない。代役がない。年に一日か二日は、風邪の発熱で動けない日が出来

たりする。そんな日は、電話口で坊守(ぼうもり)が謝りの言葉を重ねて、一方で近隣の寺に電話をかけて手の空いている坊さんを捜している。坊守というのは、たいていが住職の女房で、寺のマネージャーである。坊守が住職は、寺に居なければならぬと言うと、言いつけは守らねばならない。

このゴールデンウィークも終わろうかと言う頃に電話が鳴った。Fさんのおばあちゃんが亡くなったと言う。Fさんのお宅は90歳に手が届こうかというおばあちゃんと60歳を越えた息子さんと二人暮らしである。おばあちゃんには娘がいるが、嫁いでいる。電話をくれたのはその娘である。電話口で、セレモニーホールで家族葬をしようかと思う、と言った。お金はあるのかと尋ねた。無いから、家族葬と思ったそう。家族葬だと、会葬者が来ないから香典は無い。葬儀費用を家族で負担しなければならない。いくら安くても

葬儀費用が無いのだから家族葬はむづかしい。

私は、寺の本堂で普通の葬式をしないかと、持ちかけた。本堂ですと葬儀費用が安くつくから、香典で葬儀の費用は払えるだろう、と言った。おばあちゃんには、わずかでも蓄えはあったかもしれない。でも、この10日ほどのおばあちゃんの入院費を考えればその蓄えも心もとない。私は、前号で書いた葬儀屋さんに電話をした。本堂で葬式をするので、15万円程で引き受けてもらいたいと頼んだ。病院から寺までの寝台車の料金、ドライアイス、お棺、火葬料、霊柩車の料金をざっと見積もった額である。実際には、本堂の前に張った受付用のテントをレンタルして、手伝いに出てくれた隣保の人たちに弁当を用意したりして、総額20万円程になった。

隣保長に、何人くらいの方が会葬に来てくれるだろうかと尋ねた。100人程は来るだろうと言う返事だった。香典は20万円を超えるだろうと皮算用をした。このおばあちゃんはこれまでから、近所のお葬式には付き合いをしてきたのだから、そのくらいの香典は集まるだろうと思った。

また、今まで息子さんは隣保のお葬式の時には手伝いに出ていた。だから、隣保の人たちも当然のように手伝いに

出てきてくれた。嫁いでいる娘さんには、親戚の方で生花を出してくれるようお願いしたので、お棺の周りにはお花が飾られた。お葬式の体裁はりっぱに整った。

このお葬式を提案した理由は経済的ばかりではない。Fさんのお宅はおばあちゃんと息子さんが力を合わせて暮らしてきた。息子さんは新聞配達で収入を得て、読み書きやお金の計算はおばあちゃんの役割であった。近所の人たちも私も、この高齢のおばあちゃんが亡くなると息子さんがどうやって暮らしていくのか心配していた。このおばあちゃんが体調を崩したのは10日程前であった。近所の人たちが救急車を呼んでくれた。

このおばあちゃんが亡くなって家族葬をするならば、近所の人たちは手伝いに来なくてもいいし、会葬にも来なくてもいいと言うことになる。近所の人たちは、このおばあちゃんが亡くなったことも知らないことにしておかねばならない。それが家族葬と言うものだ。

おばあちゃんが亡くなって病院から寺の本堂に運ばれて来たときも、隣保の代表者が駆けつけて来た。隣保長にお葬式の手伝いをしてほしいと頼むと安堵の表情を浮かべた。葬儀の受付や案内係を隣保の人で分担をした。葬儀

の司会の料金をカットしたので、隣保長に司会を頼んだ。原稿は私が書くからと言って。

お葬式が済んでお骨を拾って帰ってきたら、近所のおばあちゃん二人が家に上がり込んで、早速Fさんの息子さんにあれこれと指図をしていた。ひまをもてあましていた年寄りにも仕事ができる。これからも近所の人たちがいろんなお節介を焼いていこう。たまには、的外れなお節介もあるかもしれない。息子さんもこれまで通り新聞配達をして暮らして行けそうだ。

## 2. お葬式の積立金

先日、Gさんのお宅に百ヶ日法要でお参りをした。百ヶ日というのは、お葬式が済むと、初七日、二七日、三七日と続いて七七日(四十九日)まで七日参りが続き、百ヶ日があつて、一周忌法要と続く一連の法要の一つである。百ヶ日の読経の後、Gさんの奥さんが「私は、今もずっと罪の意識でイッパイなのです」と言った。

そのお宅では、おばあちゃんが亡くなった。そのおばあちゃんは死後、一週間程して発見された。奥さんは、そのことを言っているのだ。おばあちゃんは一人暮らしで、隣接して息子さんのお宅がある。90歳に近いこのおばあちゃんはこれまで元気で、息子さんが

毎週日曜日に買い物に乗せて行くのが恒例だった。いつものように日曜日、おばあちゃんを訪ねたら台所で倒れたまま亡くなっていた。警察が来て状況を調べて、おばあちゃんを連れて帰って検視をして、事件性がないのでお葬式をした。

一週間も気が付かないなんて、と言う人もあるかもしれない。このおばあちゃんは、私がお参りをしたときに隣の息子家族のことをよく言っていた。「息子夫婦は私のお金ばかりをあてにしている。孫は小遣いをせびるばかりだ」と言っていた。こんな言葉ばかり発していると、訪問者の足は遠のく。このおばあちゃんは、人が尋ねて来ないことを気にするようでもなかった。

最近のお葬式は高額のコストがかかるというので、葬祭会社によっては積立金の勧誘に回ったりしている。マッチ・ポンプのような話である。私はお参り先で老人と話す機会が多い。そんな時、葬祭会社の積立金をしているという話をよく聞く。

「積み立てなんか止めておいて、息子さんに葬式代だと言ってお金をあげればどうですか？」

「そんなことをしたら、息子は私の葬式代を自分のことに遣ってしまうじゃないの」

たとえ息子が親の葬式代を使い込んでも

いいではないか。葬儀会社は契約通り葬式をしてくれるだろうが、葬儀の翌日に精算を済ませると亡くなった人のことを覚えているだろうか。そんなことが葬儀だろうか。

息子よりよく知らない会社を信用する。人のつながりよりも、契約に守られた孤独を選ぶのだ。これは、老人だけの生き方ではない。無縁社会や孤独死を作っているのは現代の我々である。人の繋がりはずらわしいものである。人の繋がりの上に葬儀は成り立っている。わずらわしくない葬儀を求めている姿はさびしい。

ところで、私はその奥さんが言う罪悪感を否定するつもりはない。奥さんの罪悪感はあるのである。

数年前のことであるが、家族で夕食に出かけて、帰ってからお風呂につかりながら亡くなったおばあちゃんがいた。近所の老人が「いい亡くなり方だ」とうらやむように言った。息子さんが「あれが最後やったら、もっと美味しいものを食べに行けばよかった」と言っていた。ユーモラスな話だけれど、息子さんは大まじめにそう思っていた。

家族にとって、これでよかったと言う死はない。強い繋がりのある人が亡くなると、言いしれぬ罪悪感があったりする。世間の相対的な善悪による罪悪感ではなく、絶対的な罪悪感である。私が出会ったお葬式で、多くの人がそんな罪悪感を

もっていたように思う。

### 3. とぶらう

先月、14歳になる我が家の犬が死んだ。ペットとはいえ家族の一員のような存在であり、その死は悲しい。とは言え、私はペットの葬儀をしない。先日、仲のいい住職が「俺は、御布施が貰えるならペット葬だってするぞ」と冗談で言った。葬祭業者によれば、人間の葬儀よりお金をかけたペット葬もたくさんあるそうだ。現代はそんなものかもしれない。人間の生活より費用のかかった生活をしているペットがずいぶんという。「生きる重み」、「死ぬ重み」を考えてしまう。

斎藤茂吉は『赤光』の中で、老母の死に対する悲しみ、畏れ、慚愧、自分の生に対する自問を歌っている。大正時代の文学者が、その時代の生死観を表現したのかもしれない。今、東北地方での膨大な死を「悲しみ」だけで表現しているテレビには、違和感を覚える。人間の死に際して悲しみだけであれば、ペットの死と差異がない。

もちろん大切な人の死に際して、計り知れぬ深い悲しみがある。嗚咽の中で「なぜ死んだのか」という問いが発せられる。それは死因を究明する言葉ではない。死とは何であるかを問いかけているのだと思う。その問いかけは、私の生に対する自問でもある。亡くなった方と私の繋が

りから私の人生への問いかけがある。

今、家族葬と言う言葉が横行している。葬儀が人の繋がりの上に成り立っているのだから、家族葬と言う言葉に違和感を覚える。

最近、そんなに珍しくない話がある。田舎で老婆が一人暮らしをしている。子供達は都会でそれぞれ暮らしている。その老婆が体調を崩して、近所の人たちの世話になって入院をした。しばらくの入院で老婆は亡くなった。子供達が帰ってきて、子供達だけで家族葬をした。近所の人たちには知らせなかった。どれだけの人に声をかけていいのか分からないし、今後も付き合いいけないので、家族葬にした。坊さんに関しても今後の仏事の付き合いが出来そうにないので、セミナーホールに頼んでもらった坊さんにその場限りの読経をしてもらった。

「とぶらう」という言葉が、「葬儀をする」という意味と「尋ねる」という意味

であると私は聞いている。私たちは、葬儀という儀式だけを「とむらい」だと思いがちである。しかし、人の死に際して生死の意味を尋ねていくのがとぶらいである。だから、私は葬儀を告別式とは呼ばない。

私は葬式坊主の仕事は、人間の死に寄り添う中で新たな人生観に出会っていくことだと思っている。数ヶ月前の話である。七日参りに行ったら、近所のおばあちゃんがお参りに来ていた。初対面のおばあちゃんだった。お経の後、こんな話になった。

「わたい、百まで生きられるやろか？」

「坊さんに聞かれても解らん。人の寿命は解らへん。」

「わたい、百まで生きたいねん。息子が四十で死んでな。かわいそうやし、悔しいし。だから息子の分も生きたいねん」

不意打ちを食らった。返事の言葉が出なかった。涙がこぼれた。